気圧なく降水あり）の日数は冬にかけて増加し，夏にかけて減少するという結果が得られた。このことは，6月・7月の降水は前線性の比較的弱い降雨により，冬の降水は北西季節風による降雪によりもたらされることに対応する。また月別では低気圧と降水量の相関が高い年に②の日数が少なくなっている。

最後に，同じく日単位で，停滞する低気圧と降水量の関係についてみると，6月・7月は停滞の日数が多いが降水に結びつく割合が低く，逆に冬は低気圧数と降水量の相関がほとんど見られなかったにもかかわらず，停滞という現象に限っては降水をともなっていることがわかった。

以上の結果を日本の気候の特徴に照らし合わせて述べる。気候が温暖化している時期や，冷夏，猛暑といった各年の特徴は，日本海低気圧の総数，あるいはそれと秋田の降水との相関の有無とある程度関連づけられることがわかったが，この問題をあきらかにするためには，別な角度からの検討が必要となるため今後の課題としたい。

観測所の移転に伴う周辺環境の変化が気温に与える影響

長澤純子

本研究では，アメダスの観測地点自体の移転に伴って観測環境が変化した地点，銚子において，気温データにどのような影響があったかを月平均気温を対象として調査・分析した。なお，銚子の移転が行われたのは1986年8月である。それ以前の観測値点は市の中心にやや近い銚子電気鉄道の観音駅南側の比高数メートルの丘の上にあったが，移転後の観測値点はそこから北東約2 kmの海岸に近い台地上にある。地形図からの読みとりによると，太平洋からの距離は移転前2,325 m，移転後338 mである。

分析は，銚子の気温観測値（日最高気温・日最低気温・日平均気温それぞれの年および月平均値）を，移転のなかった周辺の2地点鹿島・横芝の観測値およびそれらの平均値と比較することより行った。比較対照地点として上記2地点を選定した根拠は，銚子と気候が似ていること，1地点ではその地点の局地的影響が大きな影響を与える恐れがあることである。後者の視点からは地点数が多いことが望ましいが，前者の視点からからは内陸の地点が加わることが考察を困難にすることが予想された。以下，鹿島・横芝2地点の平均値をバックグラウンドの値と表記する。

データに関しては，銚子の移転が行われた1986年の観測値は対象から除いた。移転前および移転後の平均値を算出する場合には，使用データ期間を同じくするために，1979年から1985年の7年を移転前，1987年から1993年の7年を移転後とした。

まず，移転前・後の気温について年平均値を比較したところ，銚子，バックグラウンドいずれもほぼ同様の値を示しており，年平均気温においては移転に伴う影響はなかったと考えられる。

次に，月平均気温で比較してみると，冬から春にかけて（12月～4月）は，移転により影響は受けていないと判断されたが，夏から秋にかけて（7月～10月），特に8月・9月には影響が認められた。すなわち，明らかに銚子とバックグラウンドの差に移転前後に違いが現れた。すなわち，8月その差は移転前0.2℃から移転後は0.4℃，9月は移転前0.9℃から移転後は03℃とともに0.6℃低下している。移転により銚子の夏の気温の観測値は低下した。

そこで，夏の気温の低下させることに影響を与えた原因と考えられる，日照時間について検討したが，有力な原因とは考えられないという結果となった。また，周辺の土地利用を比較してみたが，これにも顕著な差は認められなかった。これらのことから，移転後の銚子の夏の気温低下は，海洋の影響によることが推定される。最後にここで明らかになったことから，気象庁が観測所の移転等，観測方法等の変更際し，その前後を「接続」とするか「切断」とするかの判定について検討した。銚子の気温は，この移転では「接続」の扱いをされている。『地上気象観測統計指針』の接続可否判定の項によると，

判定は1月・8月の日最高気温・日最低気温の月平均値について，累年平均値と移転後の数年の平均値の差を標準偏差を考慮して行うとされている。銚子の「接続」の判定はその限りでは誤りではないが，この考え方を他の月に当てはめ，詳しくみていくと接続不可能な月もあり，判定対象を1月・8月のみに限ることが必ずしも適当であるとはいえないことが明らかとなった。

雨に関する天気予報の利用法と信頼性を問う意識調査

山　下　早　苗

天気予報の利用法について，都市化が最も進んだ東京と斜面が多い長崎とで，面接および郵送により意識調査を行った。対象者には，服装や行動が降雨に影響されやすい女子大生を選んだ。学歴や社会的地位は全被験者で同じなので，結果の差は地域差と解釈できる。

傘を持って家を出る目安は，長崎では降雨確率50％にピークがあるのに対し，東京では30％と50％とに2つのピークがある。長崎では，交通手段の制約が大きく天候により行動が制限されるため，女子学生は確率半々という明確な基準で行動するらしい。それに対して東京では多用な交通手段が発達していて，天候に対しても臨機応変な行動がとれるので，女子学生は降雨確率を柔軟に受け止めていると考えられる。

天気図から翌日の天気を判断する読解力は，東京のほうが高い結果となった。日本の西端に位置する長崎では，西から東へ天候が変わる（低気圧が移動する）という原則を応用できないので，天気図を読む習慣が低いと考えられる。いっぽう，週間天気予報によって将来の予定を変更するかという設問では，長崎の女子大生のうち天気予報全般への関心が高い層で，予報への高い信頼度があった。

以上のように，東京の女子大生には天気予報への高い関心があるが，長崎では個人差が大きい。西日本ではより広域のアジア天気図を公表するなど，地域の実態に合わせた天気予報が必要であろう。

在日外国人留学生の生活と抱える問題
――対面インタビューを通じて――

櫻　井　亜　希　子

1998年度の『出入国管理統計』によると，平成9年度末の「留学・就学・研修」の在留資格で滞在している外国人は15万人にのぼる。お茶の水女子大学にも1993年4月現在で，192名の外国人学生が在籍している。しかし，多くの日本人学生には彼らとの交流の経験がなく，彼らについて日常生活や考え方を知る機会も少ない。今回の調査によって彼らの生活や問題についての一例を紹介できたらと考える。

第1章では「日本における外国人の現況と問題」として，既存の外国人学生に関する先行研究・調査をとりあげ，そこから分かった彼らの現況と抱える問題について示した。居住・アルバイト・勉強・日常生活についての問題である。

第2章では，まず「生活時間調査」の統計を用いて，一般的な日本の大学生の日常生活について，1日の時間の使い方により考察した。次に実際のインタビュー調査について，外国人学生・日本人学生ともに1人ずつ紹介している。実際の調査人数が非常に少ないので，データとしての処理はせず，各学生の生活を1例として紹介していく形をとった。

最後の第3章では，インタビュー調査についての考察をしている。ここでも定量的データとしては考えず，既存の外国人学生に対する一般的なイメージと今回の調査でわかった実際の生